◆はじまりのころ

「ビオトープ・イタンキの会」の発足から15年になるのを機に、はじまりのころの様子を先行実験池の記録「鶴の雫」の前文から振り返ってみたいと思います。

ビオトープ・イタンキの構想を具体的に提起するのに先立って、1998年後半より隣接する窪地で、先行実験を続けてきました。そこは山の斜面から土砂を採取した跡と思われる窪地で、5×10m程度あり、中央から少量の湧水があって湿地となり、水から離れた部分はかつて裸地として放置されたためか、外来種のオオアワダチソウが密生していました。水深30cm位の浅い小池を作るべく手を付けてみると、泥の中からは、ゴルフボール、ビールビン、角材、ビニールなどが出てきました。

地元の「鶴ケ崎」から鶴の字をとり、ほんの1滴ほどの小池であることと「雫が寄って海となる」という言葉にあやかるように「鶴の雫」と名付けて、密やかにスタートしました。翌春から、ボツボツと池の手直しと動・植物の導入を始め（中略）このリストは同時に、最悪のケースとして「鶴の雫」が「不法な無許可工作」と判断された時に、私自身の手で、導入したものを処分・撤去するための覚えとしての意味も持たせてあります。

多くの皆様の理解と支持を得て、ビオトープ実現の役に立てれば幸せです。（2001年11月13日　記す）

2003年夏に策定された室蘭市の「緑の基本計画」の中に、イタンキ潮見公園内にビオトープを作ることの「検討」が盛り込まれ、この先行実験池「鶴の雫」が「不法な無許可工作」と見なされる心配は解消しました。

この間、ビオトープ・イタンキの会が発足した2002年5月には、遠足に来ていた小学生がこの池を「発見」、6月にかけて、池の周囲のヨシ藪がグランド状態になるほどに、子ども達の来訪を受けました。子ども達を惹きつけたのは主にトミヨ、ザリガニ、オタマジャクシでしたが、最も被害を受けたのは、サワギキョウなど周辺に植えられた植物でした。

この事から、今の子ども達がこういった「獲物のある自然」にいかに飢えているかという事が良くわかりますし、ビオトープを作る際のデザインや「ありよう」を決める上での貴重な体験となりました。また公園の遊具に置き換えてみたときに、小学生の子ども達をこれほど夢中にさせる遊具はなかなか無いのではないでしょうか。

2005年、行政の理解を得られないまま「鶴の雫」は7年目に入り「実験」としても成熟の域に入ってきました。「当面の予算化が無理ならば外部からの助成金を受けて着工したい」との申請は「都市公園条例」を示し拒否されました。

2006年に入り「公園施設設置等の許可」という形でビオトープの造成が可能となり、この年に15㎡、2007年300㎡、2008年500㎡の防水シート埋設の工事を行いました。多くの市民・外部の団体の寄付金・助成金をあてての着工でしたが、2008年には室蘭市の補助金も加わりました。2006年から08年の造成により40%程の進捗となり、「ホタルの復活」をはじめ「室蘭在来」のトミヨやエゾホトケドジョウが主役の「獲物のあるビオトープ」の実現が見通せるところまで来ました（2008年11月13日　記す）

2011年春、ビオトープの造成工事を完了することができました。およそ面積2000㎡延長210mの池・水路と200㎡の湿地です。いくつもの地形的・生物的要素がコンパクトに集中しているイタンキは水域が加わることにより、さらに多様なふる里の生き物を育むことが可能となりました。造成が完了したことにより今後は「失われた室蘭の湿原」をモデルとした自然の再生と「獲物のあるビオトープ」での子ども達の自然体験をサポートすることが活動の中心となります。

8月には、活動の趣旨に沿った形で「室蘭市ビオトープ憲章」が制定され、行政とNPOがそれぞれの立場と能力に応じて協働することが可能な状況となりました。　これまでに実現した「速やかな自然回復」に加えて、潮風最前線に進めている植樹が海岸林となり、エンレイソウの群落ができ、セミの鳴声が響くようになるにはまだかなりの時間を要する事でしょう。（2011年11月30日　記す）

「ビオトープ」という言葉に出会う以前2001年頃までは「公の湿地箱庭」という言葉を当てたりしていましたが、資金は無く行政の理解を得るまでにも大変長い時間を要しました。しかし、壁に突き当たり行きづまってしまった時には不思議とそのカベの横にポッカリと穴が開いて新しい展望が開けるのです。新しい人とのつながりができて前進する・・・。そんな不思議な感覚を幾度か経験しました。あまり前例のない、手本となる事例の無いことを進める時には「思いっきり遠くを見る」ことも良いようです。たとえば「獲物、ビオトープ」と入力してネット検索してみても、採集OK，持ち帰りOKなんて活動をしているところは見つかりません。でも、何のためにビオトープの活動をしているのか？と自問したときに、思いっきり遠くを見て、「子ども達がここでの体験を通じてふる里の自然・自然環境に対する関心と理解を深め、より広い視野に立って地球環境のことを考えることのできる人材、予想される温暖化の困難な時代を克服していける人材が育ってくれることを願う」と答えてみると、ビオトープ・イタンキのありようは自ずと「獲物のあるビオトープ」となります。ビオトープ・イタンキから雪捨て場、小山、ユースホステルの斜面、鳴り砂の海岸線にかけての一帯が何かしら統一性のある自然公園として組みあがっていくことを、最近は夢見たりしています。　（ 2017年6月13日　記す　大西　勲）